

不思議な帽子

豊島与志雄

青空文庫

ある大都会の大通りの下の下水道に、悪魔あくまが一匹住んでいました。まっ暗な中でねずみやこうもりなんかと一緒に、下水の中の汚物等おふつをあさって暮らしていました。ところがあ
る時、下水道の中に上の方から明るい光がさしてしまいましたので、何だろうと思つて寄つて
ゆくと、下水道の掃除口が半分ばかり開いています。悪魔は何の気もなくその掃除口
につかまつて、そつと外をのぞいてみて、びっくりしました。街中に明るく燈火あかりがともつ
ていて、大勢おおぜいの人がぞろぞろ通つていて、おもしろい蓄音機ちくおんきの音までも聞こえていま
す。

「ほほう、まっ暗な汚いこの下水道の上に、こんな立派な賑にぎやかな通りがあるうとは、今
まで夢にも知らなかつた。何ときらきら光つてる燈火だとか。何と大勢の美しい人間共
が通つてることか。何という賑やかな華やかさだ。下水の掃除人がこの掃除口を閉め忘れ
てるのを幸いに、俺おれも少しこの賑やかな通りを散歩してみるかな」

そしてこののん気な悪魔あくまは、下水道からひよいと飛び出して、小さな犬に化ばけて、街がいろ

路樹じゆの影をうそうそと歩き出しました。昼のように明るい街路まち、美しい賑にぎやかな人通り、
宮殿のようにきらびやかな店先、うまそうな食物の匂におい、楽しい音楽の響ひびき、そんなもの
に悪魔は気がぼーつとして、いつまでもうろついていました。

そのうちに夜はだんだんふけてきて、人通りも少なくなり、商店の窓もしめられ、賑にぎやか
かだった街路が淋しくなり始めました。悪魔はふと気がついて、自分が飛び出したあの下
水の掃除口のところへ、大急ぎに戻かへってゆきました。ところが、いつのまにか掃除人が戻
ってきたとみえて、大きな鉄の蓋ふたがかっちり閉め切られています。

「ほい、これはとんだことをした」

そして悪魔は、方々の掃除口を探して歩きましたが、どこもここもみな、頑がんじよう丈じやうな鉄
の蓋が閉め切つてあつて、下水道へはいり込む隙間すきまもありません。

「弱つたな。どうしたら下水道へ戻かへってゆけるかしら」

思い迷つてふらふら歩いていると、酔よっぱらいの男や商店の子僧こぞうなどから、野良犬だと
いっておどかされたり追おっぱらわれたりしますし、巡じゆんさ査さががちや剣を鳴らしてや
つて来たりするものですから、悪魔はすっかりしよげかえりました。そしてどこかめぐり
込む隅すみでもないかと、きよろきよろ探し廻まわつてるうちに、ある立派な帽子屋ぼうしやの店が閉め残

されてるのを見つけました。店の中には誰もいないで、奥の方に番頭ばんとうが一人居眠りいねむをしています。

「しめたぞ。今夜はこの店の中に隠れるとしよう」

そーつとはいり込んで、陳列棚ちんれつたなの上に飛び上がって、ひよいと帽子ぼうしに化けて素知らぬ顔そしをしていました。間もなく、奥の部屋から二三人の子僧こぞうが出て来て、表の戸締りをして、電気を消して、また引つ込んでいきました。

悪魔あくまはほつと息をついて、やれやれ助かったと思うと、急に疲れが出て、帽子に化けたまま、ぐっすり眠ってしまいました。

二

さてその翌朝、悪魔が眼を覚ますと、もう明るく日がさしていて、店の中には大勢おおぜいの番頭ばんとうや子僧達こぞうが、掃除をしたり帽子を並べ直したりしていました。

「おや、寝過ねぐあごしたのかな。汚い下水道の中とちがって、あまり寝具ねぐあ合いがよかったものだから、早く眼を覚ますのを忘れていた。今逃げ出せば見つかるし、まあいいや、もう少し

ここにじつとしていたら、そのうちに逃げ出す隙があるだろう」

ところが、その隙がなかなかありませんでした。店の中には幾人もの店員が控えていますし、表には大勢の人が通っています。とうとう昼頃になりました。

その時、すてきにハイカラな洋服を着て、胸に金鎖をからましている紳士が、帽子を買いにはいつて来ました。そして番頭に案内されて、陳列棚の帽子を見て廻りました。

「しめたぞ」と悪魔は考えました。「一番上等な帽子に化けて、あの男に買われて、ともかくも外に出てみるとしよう。ここにこうしていたんでは、窮屈で仕方がない」

その考えがうまくあたって、金鎖の紳士は、悪魔が化けてる帽子に眼をとめました。

「この帽子はすてきだな、格好といい色つやといい、どうも……珍らしいよい帽子だ。これにしよう。いくらだね」

番頭はその帽子を手を取って、小首を傾げて眺めました。自分の店にあるのだが、どうも見馴れないすてきな帽子なんです。でも、高く買ってさえもらえば損はないわけですから、とび離れた高い値で売りつけました。紳士はその帽子がよほど気に入ったとみえて、たくさんのお金を払い、古い帽子は打ち捨ててしまつて、新しい帽子を頭にかぶつて外に出ました。

悪魔はおかしさをこらえて澄^すましてきつていましたが、今こうして、ハイカラな洋服の紳士の頭にのつかつて、賑^{にぎ}やかな大通りを通つてうちに、非常に愉快な得意な気持ちになつて、ぐつと反^そり返りながら、逃げ出すのも忘れてしまいました。

やがて紳士は、ある立派な洋^{よう}食^{しょく}屋^やへはいつて昼の食事を始めました。悪魔の帽子がよほど気に入つたとみえて 入口の釘^{くぎ}にもかけずに、ちゃんと食卓の上ののせておきました。次に見事な料理の皿が運ばれました。食卓の上に帽子となつてひかえてる悪魔の鼻にも、うまそうな匂^{にお}いがぷーんと伝わってきました。すると悪魔は急に空腹を覚えました。考えてみると、昨日の晩から何にも食べていなかったのです。

「うまそうな料理だな。下水の中に流れてくるものなんかとは、比べものにならない。あ、あ、いい匂いがしてる。それに俺の腹はぺこぺこだ……構^{かま}うもんか、少し盗み食いをやれ」そして悪魔^{あくま}は、紳士がビールのコップを手にとって、ぐーっと飲んでる隙^{すき}に、皿の中の料理をぺろりと頬張^{ほおば}つてしまいました。それに味をしめて、次の皿のもその次の皿のも、大きい口でぺろりと頬張^{ほおば}つてしまいました。

紳士はビールを一口飲んで、さて料理を食べようとすると、皿の中にはもう何にもありません。

「おかしいな。どうも……」

次の皿もそうなものですから、しまいに紳士は両腕をくんで考えこみました。

「今日は変な日だな。夢でもみてるのかしら」

こつんと額ひたいを一つ叩いて、それから急いで勘定かんじょうをして外に飛び出しました。大事な帽子ぼうしを頭にのせることは忘れませんでした。

空はやはりからりと晴れて、日が照っていました。けれど、いつしか風が出て、大通りをさっさと吹き過ぎていました。それでも悪魔は、うまい料理に腹がいっぱいになって、紳士の頭にのつかったまま、ついうつらうつらと眠り始めました。

三

しばらくたつて眼を開くと、そこもやはり賑にぎやかな大通りで、ハイカラ洋服の紳士はステッキを打ち振りながら変なしかめ顔をして歩いていました。きっと腹が空いてるんだな、と思うと悪魔は、急におかしくなって、ははははと笑い出しました。がその声に自分でもびっくりして、首を縮こめるとたんに、何だか寒くなって、うつらうつらしてる間に風邪かぜ

をひいたとみえ、大きなくしやみが出てきました。

紳士は驚いて立ち止まりました。頭の上で笑い声がして、次にくしやみの音がしたのです。まさか、悪魔あくまの化ばけてる帽子ぼうしをかぶつてるとは思わないものですから、あたりを見廻したり空を仰いだりして、きよんとした顔つきで考えました。

「変だな」

その時またさつと風が吹いてきました。悪魔はそれにま正面から吹きつけられて、くしやんと、も一つくしやみをしました。

「おや」

こんどは紳士も頭の帽子に気がついたとみえて、手をあげて帽子を取ろうとしました。もう悪魔は絶対絶命です。手に取って見現みあらわされたら大変です。どうしようと思ったとたんに、ふといいことを考えついて、紳士の頭が横に傾いた拍子に、風に吹き飛ばされたふうをして、ふーつと往來おうらいに飛び降りて、ころころと転がって逃げ始めました。

四

紳士は大事な帽子が風に吹き飛ばされたのを見て、後を追っかけてきました。悪魔にとつては、つかまえられたら一大事です。一生懸命に転がって逃げました。紳士はどんど追っかけてきます。そのうちに、立派な紳士と帽子とが駆けっこをしてるのを見て、大勢おおぜいの人がおもしろがつてついて来ました。

「よく転がる帽子ぼうしだな」

「まるで生きてるようだな」

「おかしな帽子だな」

「つかまえてやれ、つかまえてやれ」

大勢おおぜいの人が紳士と一緒に追っかけてきます。つかまったら最後だ、と悪魔あくまは思つて、くるくるくるくるまわりながら、一生懸命に逃げ出しました。あまり転がったので眼がまわつて、めくら滅法めつぼうに逃げてるうち、ある橋のところへやってきて、道をあやまつたものですから、あつというまに川の中へ落ち込みました。

「川に落つこつた、川に落つこつた」

「ぼかんとして浮いてやがる」

「竿さおを持って来い、竿を」

大勢の人ががやがや騒ぎ立てました。

悪魔は川に落っこつて、眼を白黒さしていましたが、やがて気が静まると、きらきら光つてる太陽が見えます。岸に立って騒いでる大勢の人が見えます。うらめしそうな顔をしてるハイカラ紳士も見えます。

「はてどこへ逃げたらいいかしら」

そう思つて見廻すと、川の岸の石垣に、大きな円い穴が口を開いて、汚い水が中から流れ出ています。嗅ぎなれたくさい匂いにおがしています。

「これだ」と悪魔あくまは心の中で叫びました。「俺の住居すまいだ。下水道の出口だ」

そして、帽子ぼうしが水に流されるようなふうをして、つーつと泳ぎだして、下水道の口の中に飛びこみました。

それを見て、岸の上では大変な騒ぎになりました。

「帽子が泳いだ」

「下水道の中に飛び込んだ」

「お化けばの帽子だ、お化けだ」

「不思議な帽子だ」

わいわい騒ぎ立てて下水道の口をのぞいています。しかしいつまでたっても、もう帽子は二度と出て来ませんでした。

帽子はもうちゃんともとの悪魔の姿になって、下水道の口からちよつとのぞいて大勢おおぜいの人を見ると、こそそそと中の方へはいつてゆきました。

「あぶないところだった。だがここまでくればもう大丈夫だいじょうぶだ。どうも変に寒い。珍しいごちそうを食べて、あの男の頭の上で居眠りいねむをしたので、風邪かぜでも引いたのかな」

そしてその下水道の奥のまっ暗な中で、悪魔は、また大きなくしゃみをしました。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

不思議な帽子

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>